

仏の願い

平成 21 年 西雲寺だより 立春号 (10 号)



エンレイソウ



オウレン

立春は、冷たい北風の中に春の光を感じずる日と定義されている。一年で一番厳しい寒さの中に春の光を感じずるといふ、東洋人の感性を大切にしたい。

今年は今雪のない立春を迎えた。楽な気もするが、人間の勝手な欲望によって、自然の摂理を壊してしまつたのではないか。



ミツマタ

植物が光に向かって伸びるように、我々迷いの凡夫は、無明の闇を破つて下さるまことの光に遇いたいという願いを持っている。この光を求めるところを求道心という。この求道心こそ、聞法によつて呼びさまされた、まことのいのちである。

親鸞聖人のご生涯（中編）

吉水時代

隠遁（いんとん）のころさしにひかれて

聖人二十九歳、二十年比叡の山で自力聖道（しよどう）の修行をされましたが、山を出でる決意をします。そのときのおころを御伝鈔（ごでんしょう）では「隠遁のころさしにひかれて」と述べています。隠遁とは「俗世間を捨てて隠れ住む」という意味で意外な感じがしますが、凡夫の救われる仏道を求めて出直そうとされたのではないでしようか。

仏道を歩む者に三つの障（さわ）りがあるといわれます。一つは名聞（みやうもん）（地位や名誉を求めの心）、二つに利養（りよう）（豊かさを求める心）三つには勝他（しょうた）（他より上の栄達を求める心）です。比叡の山では修行僧たちがこれらのものを競い合つて修行していたのです。聖人自身もこれらの煩惱に悩まされたにちがいありません。



吉水草庵旧跡（京都市東山区）

六角堂夢想

聖人は山を出でて、聖徳太子の建立された六角堂に百日間の参籠（さんろう）をされます。聖人は十九歳の時にも歩むべき仏道に迷い、磯長（しなが）の聖徳太子の御廟（ごびょう）に参籠し、夢の告げを受けておられます。在家のまま仏道に生きられた聖徳太子は、救世（くぜ）観音菩薩の化身といわれています。聖人は、今一度、煩惱をかかえた在家のまま救われる仏道を求めて、救世観音菩薩の前に身をすえたのです。参籠をして九十五日目の暁、夢の中に聖人は「行者宿報（しゆくほくほう）にて、たとい女犯すとも、我玉女（ぎやくにょ）の身となりて犯せられん。一生の間よく莊嚴（しょうげん）して、臨終に引導して極楽に生ぜしむ」という救世観音菩薩の声を聞いたのです。菩薩はさらに「これはこれ我が誓願（しじげん）なり、善信（ぜんしん）（親鸞聖人の当時のお名前）この誓願の旨趣（しじゆ）を宣説（せんせつ）して、一切の群生（ぐんせい）に聞かしむべし」と。その時聖人は夢の中にあ

けわしくそびえ立つ山々が並び、その高い山の上には数限りない人々が集まっているのが見えた。そこで、夢告のとおり、その誓願の意味をその人々に説き聞かせ終わったとき、夢からさめたということです。

この夢告は何を意味しているのでしょうか。それは戒を守り修行をした者だけが救われるのが仏道ではなく、結婚もし在家のまま救われる仏道があることを指し示しているのです。結婚は、男女ともに、人間としての在り方そのものに帰るということです。そして、愛憎の煩惱に悩まされる家庭生活そのものが、仏道によって莊嚴されていくのです。日常生活の外に

仏道があるのではなく、日常生活そのものが仏道なのです。
聖人は夢告をうけてしばらくの間沈思し、まだ夜の闇が残る暁に、念仏の教えを説いておられる法然上人の吉水の草庵へとおもむかれたのです。



六角堂（京都市中京区）

僧伽（サンガ）に加わる

当時法然上人は六十九歳。比叡山を出て念仏の教えを説かれて二十数年がたっていました。聖人は比叡山でそのことを耳にしながら、出遇いの縁が熟するまで長い年月を必要としたのです。

聖人が吉水で目にしたのは、庶民はもとより貴族、武士、さまざまな人々が法然上人の説法に聞き入り、生き生きと念仏申している光景だったのです。仏法に救われた人々の姿だったのです。

仏道とは三宝（さんぼう）がそろって初めて成り立つのです。三宝とは仏・法・僧で、仏とは法を説かれたお釈迦さま、法とは南無阿彌陀仏のおみのり、僧とは法にめざめ法に生きていく人々です。具体的には僧宝を僧伽（サンガ）といい、そこにおいて法が生き生きとはたらき、仏が仰がれているのです。サンガは人間がつくったものではありません。南無阿彌陀仏の法が、インド、中国、日本と七高僧をとおして綿綿とはたらき、法然上人をよき師として日本の地に誕生したのです。今、聖人は本願のはたらきを受け、吉水のサンガに召され、法然上人というよき師とよき友を賜うることができたのです。このことが救いであり、この感激が一生を貫いて、九十年という聖人の長い人生を歩みしめたのです。

『選択(せんじゃく)集』の書写
法然上人御真影(しんえい)の図画

時の摂政、九条兼実(かねざね)公は、法然上人に深く帰依し、浄土の法門の要を書にすることを要請します。上人はその要請に応じて、念仏の奥義を明らかにした『選択集』を著しましたが、九条兼実公に示したあと、それを公開することはありませんでした。法然上人は、三百八十人といわれる門弟の中



法然上人 鏡の御影
(金戒光明寺蔵)

で、わずか六人のお弟子を選んで、『選択集』の書写を許したのですが、その一人が親鸞聖人でした。聖人はその一人に選ばれ、あまつさえ上人の真影を図画することさえ許されました。当時の習慣として、その著作と肖像の書写を許すということは、その信念と思想の正統性を認められたということで、よほどの感動と喜びと、そして大きな使命感とを感得したに違いありません。聖人は後に「悲喜の涙をおさえて由来の縁をしるす」と述べておられます。

信行(しんぎょう)両座

吉水の教団には三百八十余人といわれる門弟がおりましたが、法然上人の説かれるお念仏のみ教えを正しくいたされた方は少なかったようです。そのことを日頃こころにかけておられた親鸞聖人は、お弟子たちの信念を確かめるため、法然上人の許しをえて、「信の座」「行の座」に分けることを申し出ました。「信の座」は、本願にめざめ、お念仏を申す一念に救われて不退の位に住するという信念の人の座、「行の座」は、念仏を数多く称え、その功德によって往生するという信念の人の座、そのどちらかの座にお座り下さいと提案したのです。その時、聖覚(せいかく)法印、信空上人、熊谷直実(なおざね)入道、そして親鸞聖人、最後に法然上人が「信の座」につき、ほかのお弟子たちはお互いに顔を見合わせてしり込みするばかりだったのです。これを思うに、お弟子の多くはお念仏の教えを自力にとりなして、念仏を数多く称えて、その功德によって救われるのだと考えていたのです。法然上人の説かれる「ただ念仏」は、



信行両座の場面

紙を持つ人が親鸞聖人、背後が聖覚法印、奥が法然上人。廊下中央には遅れて来た熊谷直実。

本願にめざめ本願におまかせする一念のところに往生は定まるのです。

信心一異の諍論(じょうろん)

奈良・比叡山より弾圧をうけて越後へ流罪になられるまで、聖人二十九歳から三十五歳までの足かけ七年間は、よき師よき友とともに勉学に励まれ、九十年の生涯の中で最も仕合せな時期であったと思われます。しかし法然上人の「ただ念仏」の信念を聞思(もんし)していくなかで、聖人は一つの疑念を懐かれたようです。それはお弟子たちがみな法然上人と同じ信心を生きておられるのかどうかということです。ある時、聖人がお弟子たちに、「私・善信の信心も、師・法然上人のご信心もひとつである」とおっしゃると、お弟子方は「とんでもない思い上がりだ。あなたは一体何という失礼なことをいうのか」と反論してきたのです。そこで聖人は「師のすぐれた学識と私の力が同じだなどというのならまことに恐れおおいことです。しかし往生の信心においては全く異なることはありません」といわれたのです。それでも決着がつかず、法然上人にこの子細を申し上げると、師は「私の信心も如来よりたまわりたる信心であり、善信房の信心も如来よりたまわらせたもう信心である。だから一つです。」そして「信心が異なるということは、自分の智慧才覚でおこす自力の信であるからであり、他力の信心は善人も悪人もともに如来より回向された信心であるから、皆同じで異なることはないのです。信心が同じでない人がいるならば、私が参らせていただくお浄土には、よもや参らせていただくということはないでしょう」とおっしゃったのです。

私のこころにたまたま起こった如来を信ずるといふ信心は、私が起こしたものではありません。久遠劫(くおんこう)より私に寄り添って呼びかけていた如来の願心に至り届いたもので、如来回向の信心なのです。同じ教えに生きながら、おたがい信心が異なるということほど悲しいことはありません。この悲しみから、聖人没後、聖人のお弟子唯円房(ゆいえんぼう)によって、「歎異抄」が書き残されたのです。(住職)

祖父の五十回忌を終えて

国見町辻岡公雄

先日祖父の五十回忌を近親者と共に終える事が出来た事を
まずありがたしいと思います。

五十回忌と言いますとその御縁にあえる様で何の区か念ないうが
現実かと思ひます。

お陰様下その御縁に会えた親族はあも意味を幸で
みろうかと思ひます。

明治十年に生まれて祖父は青年期に東京に出て
福沢翁におそめつた事があつたと聞いております。

私の幼き頃は角帽を私にのぶらせ喜んでおつた様は記憶が
ありません。

福井に帰り当家を来て北海道より伐木を任へ国見で
製材業を起し船川の海に入きは船でスミ度伐木と
入れたとも聞いておりますが

現任の不況と同じ世界恐慌の波にのまれ事業に天災の
大変は人ごとと王まで来たと言つております。

今の私達の時代を考えると明治大正昭和を王まで来た方にちと
天まで来て来てくる様に思えてはなりません。

心に物故にのみ走り本当の人としての生きかたを失つてくる様で
今又大正期当時の不況と同じ事を繰り返さうとしてくるのではと
思う所です。

私の好きな言葉に「振りかえれば未来」という言葉があります
もう一度過去を振り返る時代になっているのではと思つ
今日この頃です。

合掌

思いのままに

匿名希望さんより（80代女性）

ある日突然、検査に訪れた病院で、かつて聴いたことのない病名を知らされました。静かにすーっと医師の言葉が耳元を通り過ぎました。明日にでも入院と言われましたが、私は頑固に入院はしないと心に決めました。いまは漢方薬で治まっています。しみじみ一人になると、不覚にも涙を流すときもあります。

仏門の戸を叩いた弟が、愚痴や小言を言う代わりにお念仏だよと言ってくれました。そのひとは本当に心にしみました。御縁のなかつた仏様の声が私の心の奥の扉を開いて下さったと、涙が出て仕方ありませんでした。そして、弟の後ろ姿にありがとうと手を合わせました。

病名を知らされる朝、ベッドの窓からお隣の梅の木に目をやると、百羽以上の雀が白い腹を見せて私の方を見ていました。静かにほとんど動きません。着替えをしながら雀に向かって思わず手を振ると、チツチツと一声ずつ鳴いて羽音も立てず、まるで大切な者を見守るように振り返りながら飛び立っていききました。ふと私は、遠い昔に母が「お前は死ぬんだよ」と言ったことを思い出しました。お念仏とはほど遠い生活を振り返って見ると、家族が私のことではないぶん我慢してきたのだらうと思ひ当たりました。お念仏は、それを教え導いてくださいました。親の心子知らずとは、まったく今の私だったと、恥じ入るばかりでした。

そんなふうには越えてきた年を思い返してみると、黙っているばかりが家族がうまく行く方法ではない、話の仕方があることに気がつきました。ありがとうの一言が、皆の心をやわらげ、いたわりとなるのだと気がつきました。雀さえ私をいたわってくれるのに、人間の私が、まして私は、家族の世話を受けながら暮らしているのです。自分本位の生活を通してきた私は、今、仏様からも信じていただけるよう感謝しながら毎日を過ごしたいと、新しい年を迎えるに当たり、心に念じた次第です。

明日あると 思う命の はかなさを

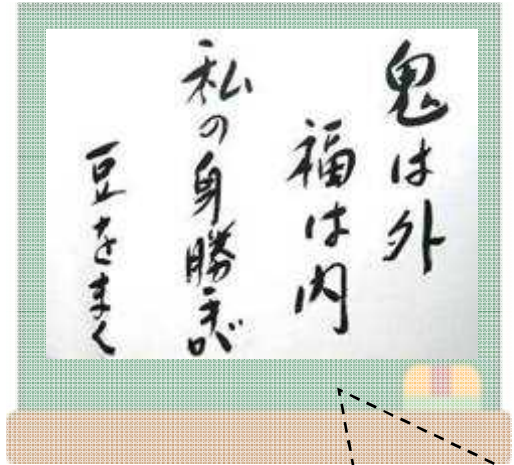
弥陀の心に まかせまいらす 合掌

ひーおじいちゃんどぼく

小林 翔汰郎

ぼくの、ひーおじいちゃんは、11月4日に
 大きくなりました。毎年けいろうの日には、お
 みまいにいったけれど、ひーおじいちゃんの
 ことはあまり知りません。おみまいに行くこ
 まごであるお父さんをたたこうとしたりしま
 した。ときどき目をあけていたけれど、ほとん
 ど目をつむっていました。ひまごにあたるぼ
 くのこともなんてわがらないんだなあと思いま
 した。ひーおじいちゃんは、一人でだれにも
 見てもらえず一人きりでなくなったそうです。
 ぼくは、よう地獄の時ならったせいでんを
 いっしょうけんめい声にだしてひーおじいち
 ちゃんに聞こえるように、読音しました。これ
 からもうじいちゃんがあり、したときには、読
 音します。おみまいに行つた時には、分から
 なかつたけれどぼくのこと分かるように大き
 な声で音読します。

山門揭示板



先輩の感動をたずねて

「鬼は外 福は内」 節分がくると、テレビ、ラジオ、新聞でにぎやかに報道される常套句である。いつの時代でも、いかなる人でも、幸せを願わないものはない。しかし、何が本当の幸せかを知る人は少ない。

世界に目をやれば戦争あり、貧困あり、また未曾有の金融危機に見舞われ、職を失い、家を失った人があふれている。このような世の中にあつて、自分だけの、家族だけの幸せを願つて豆をまく、まことに身勝手ではないだろうか。南無阿弥陀仏は「一切衆生が平等にたすかるすがた」だといわれている。如来さまによつて私たちの本当の満足が言い当てられ、南無阿弥陀仏と名告り(なりの)出て下さつたのである。私たちは聴聞して南無阿弥陀仏のすがたに近づくと、本当の満足をいただくのである。(住職)

「ごごうしゆいししよじゆ」 五劫思惟之摂受 親鸞作『正信念仏偈』より

読み方 (法蔵菩薩は)五劫、これを思惟して摂受す
五劫 人間の想像を超える時の長さ。天女が百年に一度、羽衣の袖で四十里四方の石をなでて、石がすり減るまでの時間。
之 前の「無上殊勝の願」「希有の大弘誓」のこと
摂受 おたのむこと

この一句は、仏の願いを私に届け続けて下さる「如来のご苦勞」と、その願いにそむき続ける「自分の罪深さ」を痛感するところだと、昔から先輩方が味わつてこられました。如来のご苦勞と自分の罪深さ、このほかに何も付け加えることはないかも知れません。

しかしながら、如来さまは届け「続けて」下さり、同時に私はそむき「続ける」というところに、私はまた胸を打たれます。実際、その通りだと思つからず。思いがけず相手を許す人に出会いますと、自分の狭さに恥じ入ります。思いがけず息を引き取られた方に出会いますと、自分ののんきさに恥じ入ります。そうやって今もなお、いろいろな人を通じて私にはたらき「続けて」下さるところに、先輩方も感動して「五劫にわたつて…」と歌われたのかなあと思います。

実は、如来のご苦勞が「五劫」にもわたり続ける一番の理由として、認めたくないけど思い当たる節がありまして… 「仏のお仕事」を自分の手柄にすり替え、「仏からのいただきもの」に自分のネームを入れてしまう罪… ああ、これは耳が痛い！ だつて自分の肉体だつてそうですもんね。本来はいただきものなんです。(編者)

図書紹介



『^{いた}悼む人』
天童荒太著

文藝春秋
2008年
¥1700

最近、直木賞に選ばれた本です。主人公は、まったく見ず知らずの死者を訪ね歩いて「悼む」ことを繰り返します。「悼む」とは、冥福を祈る事ではなくて、「誰とも代えられない唯一の存在として覚えておくこと」だと書かれていました。
主人公が、見ず知らずの死者のことを知るために質問するセリフは、決まっております。「この方は、誰に愛され、誰を愛し、どんなことで人に感謝されたでしょうか」「このセリフには、ずいぶん考えさせられます。
周囲の人も、ハツとするような言葉を語ります。「生きていた者が死んだとたん、数にされ、霊にされるけど、この悼む人は死んだ者に価値を与え、ささやかに讃えてくれる。」
「うセリフ、ホントに死者をモノ扱いして敬わないのが現代社会の流れだと思えます。「悼む人に覚えてもらえば、永遠性を帯びるような気がする。」
「うセリフもホントそうですよ、永遠の愛こそ、私たちが求めるものじゃないでしょうか。
それにしても、「悼む人」は頑張りすぎてイタすぎる...
それは仏のお仕事なんじゃないかな？」

所住職より
法カレニターも頂戴
心温も
晩秋り昼下り...

短歌

山門の
寂光に遇い
世のなか
忘愛のゆえに
千ボをわお水

西別所町
渡辺嘉子さん

発行
真宗仏光寺派 専念山 ^{さい うん じ}西雲寺
住職 護城一寿
筆頭総代 鈴木春夫
編集責任者 護城一哉
〒910-3523 福井市武周町5-2
電話 0776-97-2138
メール kngojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！
お手元に2部届いた時には、ぜひご活用下さい。
みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。